

「地域枠」と 学校教育の本質

まことしやかに伝わってくる話がある。ある高校では医学部の推薦入試に際し、最優秀の生徒には普通の推薦入試を受けさせ、その次の生徒に地域枠を受けさせているという。戦略としてはありかもしれないが、高校はその後のことまで考えているのであろうか。

普通に入学した医学生は6年間で卒業後の展望をつかみ取っていく。片や地域枠の学生は、入学した瞬間から地域に貢献するという使命を携え6年間を送る。両者はまったく異なる構えで勉強することになる。この点で、地域枠ではまさに人物本位で入学者が選抜されなければならない、このような進路指導には違和感を禁じ得ない。

地域枠について、入学生をその土地に縛り付ける選抜方法であるかのような言い方をしてしまったが、実は学校制度それ自体は明治以降、逆に、青年を生まれついた土地から解放するという機能を果たしてきた。近代国家として封建主義から脱却し、身分制の撤廃を実質的に達成するには、円滑に地理的移動するための交通網と、社会移動を可能ならしめる学校網の整備が必要となる。学校、とりわけ高等教育機関の整備は、学問を修めようとする青年を全国各地に赴かせることになった。

「事実上の」地域枠と 「見えない」地域枠

例えば、新潟医学専門学校（現新潟大医学部）と金沢医専（現金沢大医学部）のように、同種の学校が隣にあれば互いの地域性は高まるように思えるが、大正後期の地元占有率は両者とも2割程度にとどまり、あとは他県からの入学者であった。小樽高等商業学校（現小樽商科大）の北海道出身者は3割とやや多かったが、残り7割は宮崎、沖縄を除く全国から集まってい

大谷 奨

筑波大学アドミッションセンター教授

最終回 「マイルドな「封建制」としての地域枠

曇りのち晴れの
アドミッションな日々



た。学校制度はこのように地縁を離れ遊学する機会を与えてくれた。

しかし、これは反面、青年を故郷や家業から切り離す機能でもある。それが際限なく広がるのを防ごうと、東大農学部の前身である東京農林学校の一部の学科では、実家に農地がある人を優先入学させていた。田畑があるなら卒業後地元に戻り農業を続けるだろうと考え、その誘導を入学時の優遇措置によって図ろうとしたのである。この試みはいわば、地域枠の走りにも見える。しかし実家に土地があれば入学しやすいという選抜方法はやはり特異であるし、当時もしばしば是非について論議があったようである。

一方、もともとは県立学校であったという経緯から、地元密着で専門教育を施したのが旧制の師範学校であっ

た。その後継である戦後の教育学部や教育大学も、県内の高校から進学してきた学生を県内の学校に送り返すという機能を伝統的に果たしてきた。その意味で、教員養成系の教育学部には発足当初から「見えない」地域枠が設けられていたとも言えるだろう。

学びの構えの違いに 対する十分な理解を

1970年代に無医大県解消をめざし、医大を増設したとき、1県1医大の実現により教育学部と同様の見えない地域枠が形成される、という期待が政策側にもあったようだ。しかしその新設医大も結果的には、医者をめざす学生を全国から集め、全国に送るという機能を果たすことになった。実は増設当時から、地域枠を設定すべきという声はあがっていたが、国立大学という性格が地域枠の論議を阻んでしまった。医学部で本格的に地域枠が拡大していくのは2000年代以降であり、その評価にはまだ時間がかかる。

注意したいのは、先の見えない地域枠の中で、教育学部の学生全てが満足して勉強していたわけではなかったことだ。全国規模の大企業に就職を決め、入社後の夢を熱く語る他学部の友が羨ましかったという回想録を目にしたことがある。地域枠は、地元出身者を優遇するように見える一方、その人を地域に縛り付けるという意味では「マイルドな封建制」とも言うべきものであり、やはり特殊な制度である。

地域枠は全国に飛翔するのか、地域に貢献するのかという重い選択を迫り、入学後の学びの構えに大きく影響する。しかも地域枠は、この異例策を講じなければ地域医療の改善が期待できないという、社会や大人の都合により設けられた。導入に際し、それらはどれほど検討されたのであろう。送り出す高校や教育を担う大学には、それなりの配慮が求められるはずである。